

國學院大學學術情報リポジトリ

講評・討議

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 寺崎, 昌男 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00002095

第2部 《シンポジウム》

【講評・討議】

(司会) それでは、ただいまから壇上討議に入りたいと思います。ここからの司会は、國學院大學教務部長、柴崎和夫人間開発学部教授が行います。

【柴崎】 ただいまご紹介にあずかりました、人間開発学部の柴崎と申します。教育開発推進機構の副機構長、教務部長を務めさせていただいております。最初に松坂先生のほうから基調講演をいただいたあと、関西学院大学の田淵先生、大正大学の小嶋先生、そして國學院の加藤より、ご自身の大学における建学の精神ならびに教養教育についてお話をいただきました。これを受けて最初に、寺崎昌男先生から少しコメントをいただいた後に、各登壇者に、皆さん方からの質問なり、追加のご意見なりをいただきたいと思っております。早速ですが、寺崎先生、宜しく願いいたします。

■講評

寺崎昌男

(立教学院本部調査役、東京大学名誉教授)

ご紹介にあずかりました寺崎でございます。先程から伺っております、コメンテーターとは大変きつい役割で、あれほどそれぞれに特色のある、面白いお話を伺って、これに対して何かを言うということは、とっても大変な仕事です。でも、まあ年齢にふさわしい仕事なのだろうと思って(会場笑)、諦めて好きなことを言わせていただきます。

新たに学んだことはいくつもございま

す。まず松坂先生が仰いましたことに一つ付け加えたいことがあるのですが、それは、先生が仰った、大学の創立者達の言葉ですね、これが建学の精神の元になっているのではないかと。しかし、それがなかなか明確に、はっきりしない場合も多いということでした。私は、特に、その「はっきりしない」というケースが実は大変多いと思っております。

立教大学の例でいいますと、先程お引きになった「道を伝えて己を伝えず」という言葉、これは確かに残っているのです。ウィリアムズ師の言葉としては残っております。ところが、よく調べてみるとその言葉は、ウィリアムズ師の墓に刻まれた言葉なのです。墓に刻んだのは誰かということ、お弟子さん達です。日本人のお弟子さん達が刻んだものです。だからこれは、「ウィリアムズ先生は、道を伝えて己を伝えなかった方だ」という、お弟子さん達の評価なのです。

ですから、ウィリアムズ師自身の、つまり founder の言葉ではないのだということです。そんなふうには、ちょっとした言葉ひとつでも、実際に調べて行くと、非常に重要な側面が出てくる。私は、そういう点をはっきりさせるのが、我々歴史家の仕事であり、とりわけ大学史をやってきた者の仕事だと思っております。

さらに、もうひとつ、ありがたいことに引いてくださった、「東京大学に創立の理念はありませんでした」という私の言葉ですが、あれはどこで言ったかといいますが、学士会の晩さん会講演の席で言ったんです。学士会というのは、全部、旧帝大の卒業生が作っている会です。その時150人くらいの聴衆があって、その約6割が東大の卒業生でした。その目の前で、「理念はなかった」と言ったわけですから、生きて出られないんじゃないかと思いました（会場笑）。ところが、まったく逆で、東大を出た人たちは、腹を抱えて笑っておいりました。みんなやっぱり自覚があったんですね。思い切って言ったことに間違いは無かったと思いました。

それでは何が独自の理念を与えたか。それは、先程仰ったように、「国家の須要に応ずる」、このことで初めて理念というのが与えられたのです。そういうわけで、なかなか言葉として創立の精神を確定するのは難しい、と存じます。

次に、田淵先生のお話の中で印象に残りましたのは、最後（新中期計画の基本：ミッションステートメント策定）に出て来た、knowからunderstand、そしてachieveへ、という順序ですね。

しかもその中で先生は非常に重要なことを仰いました。学生の学修ないし研修というのは、座学だけだろうか、と。

教養の最後はachieveというところに行くんだ、ということをご指摘になったのは、非常に重要だと思います。というのは、戦後一般教育が大学に導入されたときに、実は既に、教養教育の最後の目標は、テオリアではなく——テオリアはギリシア語

の、「観照」ということですが——プラクシスなのだという理解が早くから唱えられていたのですね。このことと関わっているんだと言うことを、改めて思い出させていただきました。そういう点では、ご提言の”Mastery for Service”という言葉自身も、またプラクシスに属する言葉なのだろうと思いました。

小嶋先生のお話からは、印象的だったのは書き方授業について、担任によって変化があるということですね。このことはとても重要だと思いました。私も今立教の、大学教育開発・支援センターで、プレゼンテーションとライティング、つまりレポートの書き方と発表の仕方、これについての非常に詳しいリーフレットを編集いたしました。それを綴じて学内に配るのですが、大変な数が出て行きます。学生たちが一番欲しがりますね。高校以下の段階で学生たちは「調べて書く」という習慣が一度もない、その経験をしたことがないという、日本の公教育、特に高校以下の教育の最も弱い点を、大学は引き受けさせられているのだというふうに私は思っています。

この習慣がとても大事で、実は、高校以下の所でこそしっかり指導をやっていただきたい所です。今の学生たちにとって、あらゆる作文は「感想文」でしかあり得ないのですね。彼等は「感想文」なら書く。しかし、文章は調べて書くのだという習慣を、持っておりません。そういう経験を与えていないということが大きな問題だと思えます。小嶋先生の話からそういうことを連想いたしました。

加藤先生のお話、とても私、面白うございました。ヘリコプターを飛ばすという、

あれは初めて聴きました（会場笑）。私が聴いたことがありますのは、ある大学で、とある大家の大人数講義のとき、一番後ろでは紙飛行機が飛び交うという話を聞いたことがあります（会場笑）。非常に高齢な先生の大講義。その中で、後ろの方ではもう授業にならない。紙飛行機が飛ぶというのはそういうことですね。そこまでは知っていたんですが、ヘリコプターまで飛ばして頑張っているとは存じませんでした。とても印象的でした。

それからもう一つ、先生のお話の中で非常に印象に残ったのは、利他的行動が人間独自の行動であるという、あのポイントですね。あらゆる知識と技能、その中心にあって繋ぐのは、人として生きることであるというお話、それから更に企業の側は、大学教育に社会的知性を培うことを望んでいるというお言葉、これはとても印象的でした。

実は、大学は、それではそのために何をすればよいか、という問題が次に出て来ると存じます。私の経験から申しますと、大学は果たして規範を教えるべきかという問題があると思うのです。大学は規範を教えるべき所だという考え方は——これは、今後教養教育が普及して来て、特に産業界からの要求がだんだん強くなって参りますと、私は、大学はもっと学生たちに行儀を教えろ、礼儀を教えろ、さらにもてなしの心を育てろとか、こういう意見が出て来ることになると思います。大学はそういう方法で規範を教えろ、という社会的プレッシャーがかかって来るだろうと思いますが、私は、それは間違いだと思っています。大学がやるべきことは、道徳教育ではない

と思っています。そうではなくて、やるべきことは規範の成立根拠を教えることだと思うのです。何故に我々はこういう規範を守るべきか。その根拠は何か。先程のお話に関わらせて申しますと、まさに、コラーゲンの本質を教えるということが、実は、規範の根拠を教えるということになるのです。そういう点で、非常に大事な問題をご提示くださったと思います。

こういうふうに新たに学んだことが非常に多いのですけれども、時間が限られておりますので、急ぎたいと思います。

今日の話を持って、レジユメを読ませていただきながら、やはり、建学の理念というのをどう捉えるかという問題があると思います。私の恩師の一人であります、勝田守一という先生、もうお亡くなりになった教育哲学者ですが、この先生のお書きになったものに、非常に私は啓発されました。先生は、ヨーロッパ中世大学史を書かれた本のなかで、次のように言っておられます。

「大学は、その理念を歴史的に形成する。しかし、理念が大学を機能させたのではなく、その社会的機能に対する意識的反省が理念を形成したのが、むしろ歴史的事実である」。

短い指摘ですが、大変大事なことを仰っていると思います。

ベルリン大学の理念がベルリン大学を創ったのではないということです、たとえば。ここで見ておくべきは、「大学の社会的機能への意識的反省」という言葉、この言葉をどう読むかということです。

ひとつは、大学の社会的機能が何であるかを正確に認識する必要があるということだと思います。この正確に認識する必要を、

今私たちは、たとえばIRというような言葉で進めています。これは、社会的機能をどう果たしているか——立教大学で言いますと、たとえば立教大はどの方向に学生達を育てているか。どういう軌道に送り込んでいるか、こういう話です。さらに、地域との関係で言うと、どのくらい池袋あるいは新座に尽くしているか。今、それを正確に認識する必要があります。その上で、意識的「反省」をすると言っておられます。この意識的反省はどうすれば出てくるか。意識的反省の基礎にあるものの一つが、建学の理念です。建学の理念から見れば現在のわが大学の機能はどのように反省すべきか、また再生され得るか、ということです。こういう論理的繋がりになると思います。

そういう見方からすると、最低必要なことは、建学の理念を問題にする前提に、現実に自分の大学が果たしている社会的機能の実態を究めること、これが非常に重要だと思います。

その次は、理念と言うけれどもそれはいつまでも固定したのではなく、絶えざる掘り直しが必要だと思うのです。別の言葉で言うと、現代に翻訳するということです。たとえば先程挙げられた例で言うと、早稲田の「学の独立」だとか、慶応の「独立自尊」といっても、それは現在どういうことであるのか。その掘り直しがいつも必要だと思います。立教の場合は、長い間はっきりしなかった理念に対して、このところやっと、立教大学はリベラル・アーツの教育に専念する、という方向性が出て参りました。この点から、私どもは、立教のカリキュラムの基本的な原理を出しました。たとえば、

私が全学共通カリキュラム運営センター部長でありました頃は、環境・人権・生命・宇宙という四つの見方で捉えてみようということをご提案して、だいたいその通りにカリキュラムを作ることができました。今は三つに再編成されているということです。

リベラル・アーツの教育とは、「世界を見る眼」というものを、きちんと提供することによってごさいます。「世界を見る眼」ということを、私どもがなぜリベラル・アーツという言葉で言い表したかということ、村上陽一郎さんの解釈ですが、中世ヨーロッパで、リベラル・アーツの七つの科目というのは、専門の補助学ではなく、大変立派な目的があったのです。七つの科目は四つの言語の科目と三つの自然科目からなり立っておりますが、言語4科目の目的は教義書、バイブルを読むことであつた。自然3科目は、自然を読む力というものを育むことだつたというのです。では、立教ではリベラル・アーツを掲げることによって「世界を見る眼」というのをどうやって作ろうとしているか。それを目指してカリキュラムを作って世に問うたわけです。

最後に読み直しの基礎には、「選択された価値」があるということです。建学の精神を解明するという事は、結局、その時代々に大学が選んできた価値というものを時系列的に整理してみるとどうなるかということなのですね。

先程、東大は理念がなかったと申し上げましたけれども、では、それ以後150年の間に何の理念もなかったのかということ、「あつた」と思います。それは何か。解明の方法は、まさに正確な沿革史をきちんと確かめることによってしか見出せないのだ

と思います。

それをやることによって私が確かめ得たのは、「各科全備」ということでした。各々の科目が全部揃っている。全ての専門分野について、全て揃えておく。これが、少なくとも歴代教官達の信念としてあったということです。私もその中におりましたから、よくわかります。実態がどうかということはまた別です。ただ、考え方としてはそうだったということなのですね。従って「うちにない学問があったら、それは学問じゃないよ」と、平気で言う事が出来る。そういういかにも威丈高な特色をもっておりました。

同じようなことで、京都大学ではどうか。西山伸さんというアーカイブスの専門教授に、「京都大学の建学の精神って何ですか」と伺いますと、「少なくとも東大のような大学にならないことです」と（会場笑）いうことでした。これも建学の理念といえるかもしれません。

そういうわけで、建学の理念というのは実は、東京大学もそうですが、様々な捉え方や内容があるということですね。

おしまい、細かいことになりましたが結論だけ申し上げますと、先程あまり触れられなかったこと、松坂先生にこの際、是非お伺いしたいし、お願いしたいことがあります。それは何かというと、要するに、行政による指導や助言の方向性は今後、今日のテーマに照らしてどうなるかということです。

先程多様性ということを先生は仰いました。それから独自性、これも大事だと。学生に教えておきますと、独自性ということの重要さは特に感じます。彼等は「同じよ

うな他の大学と比べて、うちの大学がどんな独自性を持つか」という、このテーマになると目を輝かせます。たとえば立教でしたら、明治学院とどう違うか。あるいは青山学院とどこが違うか。ICUとはどうか——ということをやると、彼等は初めて「ああそうか」という顔をする。別に威張ってそう思っているんじゃないくて、実はそもそも、知らないで入ってきた。「上智・青山・立教のJARバックです、JARバックの中の立教にたまたま受かったので入って来たんです」。その程度の認識ですから、どこが本当に違うのかということが判ると、すごく安心するわけです。

実は、行政による指導や助言の中で、特に私が避けて欲しいと思っているのは、画一化です。たとえば、さあグローバル化だ、大変だ、どこでも国際教養大学になるうとか、ICUのようになるうとか、そういうふうに動いて行く危険性が、日本の場合はある。しかし、それは駄目なんだろうと思うのです。独自性が消えるということになる。そういう点ではやはり、画一化を避けていただきたい。そのことについてどのような方針をお持ちか。そういうことについてお話をいただければと思います。以上でございます。

■討議

【柴崎】寺崎先生、ありがとうございます。なお、フロアより寺崎先生に対する質問等ございましたら、後ほどまとめて受付をいたしたく存じます。

さて、今の寺崎先生のコメントを受けまして、こちらの登壇者の先生方から何か付け足したいことがおありでしたら、遠慮無

くお願いしたいと思いますが、いかがでしょうか。特にございませんでしたら、寺崎先生のご指名ということで、松坂先生から、ご回答をいただければと思います。

なお、フロアのほうからの質問の中に、少しニュアンスは違いますが、この話題に関連する質問がございましたので、併せてお伝えしたいと思います。それは、古くて新しい問題ですが、「教養教育というのは、一体どういう意味合いであるのか」ということです。

今、寺崎先生からもお話がありましたけれども、所謂ヨーロッパが有しているような意味での教養教育であるのか、アメリカ型でやっているリベラル・アーツ的なものなのか。まあ似ている所と違うところがあり、まあ両方でもあると思うのですが、文科省が言っているような教養教育、また松坂さんが今回お話しになった中での教養教育というのは、どういうことを念頭に置いているのかということですね。

この方の質問だと、教養の科目という言葉をするよりは、むしろ「建学の理念を具現化する科目群」と言った方が、大学にとっては判りやすいのではないかと、ということが書いてあります。そういうこともご質問として心に留めていただいた上で、寺崎先生のコメントにお答えをいただければと存じます。

【松坂】 ありがとうございます。考える時間があまり無い中でお答えしなければならぬのが、すごくつらいのですけれども、確かに、画一化をしたいという気持ちが文部科学省の教養教育なり大学教育の中にないかと言えば、嘘になるかなと思います。

やはり法学なら法学、経済学なら経済学で、最小基準というのがありましたけれども、何か共通のものをもっていただきたい気持ちというの、それを外に出すかどうかは別として、ないとは言えません。

あるいは、経済学部もしくは経済学科であるにも関わらず、経済の基本が判らないままに卒業させ続けている大学への若干の反省を求めたい気持ちとかはあるのかな、というふうに思っています。

ただ、その一方で、大学の教育内容に踏み込んでほしくないという、心の中の線というものも同時に持っているのかなとも思っております。

画一化というか、結果としてやはり、共通で身につけるものに学術の世界が向かっていって欲しいという思いは持っていると言うのが文科省の職員の共通の意識かな、というふうには思います。だからこそ学部が存在しているのであって——それをもし無くすか、あるいはあまり重視しないのであれば、リベラル・アーツ型の共通教育型の学部ということになるのかも知れません。

ですから、画一化されない社会と、画一化した社会のどちらを社会が選択するかによって、大学にもまた、そういう目が向くのではないかと思います。

しっかりしたお答えになりませんが、画一化については、避けようという思いと、画一化の方がより良いという思いとが、両方共存しているというのが、私が感じている感覚でございます。

それと、もうひとつ、文科省のいう教養教育はどこに向いているのかというのは、これは人によっても違うと思いますし、確

乎たる方針があるのかというと、多分無いのではないかと思います。

ただ、やはり「大学生らしい教養」という言い方が多いのかも知れませんが、「こんな事も知らないのか」というレベルのものもあれば、「そんなものの考え方しかできないのか」というようなものもあるかと思っております。どちらかというと後者のほうが、大学に対する自然な問い方で、たとえば先程のコラーゲンの話も——私もどこかで使いたいなと思いますが、コラーゲン鍋とか言って、喜んで食べてはいけないなと思いますが、そういう感覚を、高等教育を受けたものであれば当然なものとして持っているということに、大学教育の成果があったほうが良いのではないか、それが教養教育なのではないかというふうに思っております。

なにか事象があったときに、それに対して自分が、自信をもって対峙できるような力を持っている。それが教養教育だと思いますし、吐き出す力というよりは、受け取る力というふうに、私自身は思っているところです。

【柴崎】 ありがとうございます。他の先生方からはいかがでしょうか。

【田淵】 まず、寺崎先生、過分なお言葉をありがとうございます。私、そんなええこと言うてたんやろかと思ってしまいましたけれども、最後のプラクシスについてのコメントは大変示唆をいただきました。

ただ、今仰ったことで、実は昨日、内部資料ですからあまり詳しくは申し上げられないのですが、我々の学校の評価推進委員

会がございます。その中で、評価の基準ということについて、所謂大学基準協会の設定した評価で私たちが評価を行ってしまうと、自分たちの独自性はどこで評価できるんだらうか、という問題が出て参りまして——やはり、自分たちの独自性を訴えるような評価の在り方を、これは基準協会ですから、我々からも、もっと言っているんじゃないかということを考えています。

何と申しましょうか、評価というのが前に来る考え方——たとえばSGUですとか、あるいは、今私たちの学校の高校もSGHに関わっているのですが、そうした、評価に合わせる、基準に合わせるような学校の売り方、あるいはアピールの仕方をしてしまうと、まさに寺崎先生の仰っているようなことに、こちらから進んで行ってしまう危険性といえますか、そういう現実もあるということをお教えいただいたような気がいたします。ありがとうございました。

【柴崎】 これは私の受け取りなのですが、学部というか専門と言いますか、今、大学で問われているのは、ラーニング・アウトカムということも言われているように、何が出来るかということをお明確にすることであると。そう考えれば、同じ学部だったら、最低限のスタンダードというものがあっても良いのではないかと。

そういう意味では、まあ授業の内容等については画一化の方向、ある一定の方向を向いていることは確かだと思えるのですね。しかし、私立大学が目指すところは、たとえば早稲田の人間と慶応を出た人間とでは、同じ経済学部で、同じような教育を

受けたとしても、何となくみんなが感じる雰囲気が違うというような事柄——ちょっと曖昧な言い方になってしまっておりますので、あとで皆さんにもちょっとお訊きしてみたいのですが——そういう建学の精神ですとか、学風というところを、どのようにして身につけてもらうかということですね。

特に、ここにいらっしゃる中では一番大きい関西学院さん、2万人を超える学生に、3校地で教えていらっしゃるようなところと、1校地で数百人に教えているようなところとでは、やはり全然違ってきますので、皆さんもご苦労されているのではないかと思いますけれども。

それでは、続けてフロアからの質問をご紹介します。まず、関西学院の田淵先生のご発表に対するご質問がいくつかございました。

ひとつはですね、今私も言いましたけれども、関西学院さんは大きくなって、3校地で、さらに先程の話ですと、中等教育とも連携があると。それらの意見をまとめることを、一体どのような形で行っているのでしょうかというご質問です。つまり、たとえば学部だと学部長が、キャンパスだとキャンパス長のような方がいらっしゃるかと思いますが、そういう方々の間での意思疎通や意見の統一ということ、関西学院大学ではどのように行っておられるのでしょうか、ということですね。

それからもう一つ、新中期計画として進めていらっしゃるミッションステートメントについて、“I know”、“I understand”、“I achieve”の三つの段階を踏むということですが、その成果

の検証ということは、どのように考えておられるのでしょうか、というご質問もございました。宜しければその点についても併せてお話いただければと思いますが、いかがでしょうか。

【田淵】 まさに、今ご質問いただいたことこそが、私たちの課題そのものでございます。と言いますのは、ちょっと内輪話をいたしますけれども、我々の学校はこの15年間で突然大きくなってしまった。しかも、実は学校が大きくなったときに、法人合併が二回行われました。私は、その二つの法人合併の際に、それぞれの場所に関わっておりまして、現実に行っていました。私たちが元々独自にやっておりました一つのキャンパスに加えて、法人合併によって二つキャンパスができることとなったのです。

そうすると、そこに元々あった学校の理念や独自性と、私たちの関西学院の独自性とで、よくよく摺り合わせが行われて、その上で合併するというのが本来なのでしょうけれども、もっと現実的な動きで合併をいたしましたので、やはり、現実にはそれぞれの学校の理念というものがあるわけです。

ですから、まさにご質問にありました通り、それぞれのキャンパスがあり、たくさん学部長があるなかで、意思決定をどのようにしているかと言いますと、今は非常に「もたもた」という言葉しか使えない合議制の中で、「ああでもない、こうでもない」というかたちでやっている。一つの学校の営みの成果というのは、直接的にすぐ出て来るということはないので、今は、やり方

が生まれて来るのを待っているわけです。

逆に言うと、これもまた昨日あった学会でのことですが、所謂学長の権限の問題というのが出ました。やはり、今までは各学部の主体性を強く出して来ているわけですが、その合議でということではない、新しいリーダーシップの問題がある。

先程もリーダーシップのお話が出ましたが、まさに、学生達が学ぶというだけでなく、我々にとっても学校の中でのリーダーシップということが大きな課題となっておりまして、その在り方を今模索しております。

ですから、「うまくいっています」ということではなく、これから、本当に真剣に、しかも急いでやらなければならない大きな課題として受け止めるべきことだと考えておりまして、ご質問で指摘していただいたことは本当に、私たちの問題意識を明らかにしていただいたと受け止めております。

それから、検証ということについてですけれども、125周年を機に、先程お話ししたようなことをやって参りましたけれども、今までの5年間はプログラム作りでしたので、これからの5年間は検証にまわるということを予定しているわけです。

ただし、所謂数値としては——たとえば学生がどこそこで発表したとか、体育会の活動でこういうことがあったとか、そういうことを数字で出して検証するというものについては、高等教育センターという部署がございまして、そこで客観的なデータを出しておりますとは言え、それらについての解釈は、これからの課題として受け止めております。

ご質問いただいたことについて、何も答

えられないということで、もどかしいのですけれども、まさにご質問いただいたことが私たちの課題であるというふうに見ていただければと思います。

【柴崎】 ありがとうございます。このことに関係いたしまして、加藤先生にお訊きするのですけれども、たとえば國學院大學では、こういう検証ということについて、どのようにお考えでしょうか。

【加藤】 はい、國學院の教育開発推進機構は、次年度から柴崎先生が私の後任で機構長をおやりになりますので、「次期機構長におまかせする」ということになろうかと思えます。現状を申し上げますと、やはり色々なデータは集めており、今出来る範囲でその検証はしつつあります。

ただ、今しがた先生方も言われたように、「検証が本当にきちんと出来ているか？」と言うことを問われれば、やはり胸を張って「出来ています」とは言えません。

ですから、今の私に言えることは、「柴崎先生、次は宜しくお願いいたします」と（会場笑）、そういう一言だと思います。

【柴崎】 はい、あの、宜しくと言われても困るのですが（会場笑）、承知いたしました（会場笑）。

次に、小嶋先生へのご質問ですが、割合、具体的な事柄についての質問が寄せられてございます。つまり、授業についてですね。

特に日本語の授業というのは、どの大学でも、ある意味で学生の基本的な素養として考えられている中で、物を書く作法が身に付いていない、あるいは「普通の日本

語」と我々が考えるような日本語を使う力というのがなかなか養成されていないという状況があります。各大学でも苦勞をされていると思うのですが、それに関してかなり具体的な質問がございますので、幾つかお尋ねしたいと思います。

まず、評価でループリックを活用されていましたけれども、それについてのご質問です。ループリックは、受講している学生にも開示されているのでしょうか。つまり、学生は自分がこういう観点で評価されるということを知っているのでしょうか。

また、そのループリックを作成するのに、どのくらいの時間をかけているのか、またどういふふうで作っているのか、そうした点についても、簡単にご説明をいただけましたら。

【小嶋】 ループリックについては、授業が始まった直後に、「このような観点から、あなたの文章をチェックします」と学生に示しました。学生も、ループリックの表を持ってあります。そこで、たとえば横書きと縦書きと、まあ2種類の文章を書かせるのですが、横書きの場合は行頭に番号をつけて、ループリックと照らし合わせて、「ここは、文章がねじれている」「改行がされていない」「句読点が不適切」「漢字が開かれていない」とか、そういうことをして行きます。

そのループリックを作成する際には、相当時間を掛けました。それがなぜ可能だったかということ、「学びの基礎技法B」という授業を始める前の段階で、10ヶ月間ずっとFDをやって、1年前から準備しました。その結果、授業を発足してからも、試行錯

誤はしつつも、授業を進めて行くことが出来たのかなと思っています。

それともう一つ、今になって思うのですが、ループリックは5人の教員で作上げたのですが、これがもし10人だったら、ひょっとすると難しかったかも知れません。そういうふうには、ある程度の少人数と言いますか、そのほうが、こういう細かいループリックは、作りやすいのではないかと思います。学生も同じものを持っていて、自分の文章のどこに欠点があるのかということを理解するわけです。

【柴崎】 もう一つ、最初のクラスを決めるための、入学時学力診断の試験問題ですが、多分学内でお作りになっていると思うのですが、それはその後の授業でやるような内容なのか、あるいは普通に、大学入試のような国語の問題なのか、どちらでしょう。

【小嶋】 一応、一般的な大学入試問題のように、たとえば文章題、漢字や読解という総合的な問題ですね、それに準じた物を作りました。

また、漢字や語句の問題でも基礎的な、たとえば、「範疇」という言葉を知っているかとか、そういうものも入れたのです。つまり、新聞や世間一般レベルの文章、新書レベルの本から取り出した語句の問題、漢字の問題を付け足しました。

ただ、プレイスメントテストで全ての実力が測れるかどうかというのも微妙です。前期の授業が終わったところでクラス替えを行っています。つまり、夏前に先生方が本当に苦勞されたのは、学生全員の点数を出して、クラス替えを行ったことです。

非常に大変だったのです。

ただ、意外にも、プレースメントテストの成績に基づいた成績順になる傾向がありました。もちろん、下位層から上位層に入った学生もおりますけれども、それほど多くはない。そこから言えるのは、国語の能力・運用能力というのは、やはり、一朝一夕にはなかなか上がらないのだと、そういうことも同時に言えるのではないかと思います。

【柴崎】 もう一つ、小嶋先生ご自身が最後に触れていらっしゃるのですが、これから大正大学さんのほうでもセンターで、共通教育・教養教育の部分で取り組んで行かれることと思うのですけれども、課題としてお話をくださったことやその後のこと。たとえば専門教育、学部の教育との関係とか連携という点について、先生ご自身はどのようにお考えでしょうか。

【小嶋】 実は、恐らくそこが一番大事なところだと思っています。本日のご発表にもありましたように、教養教育については、どこの大学でも、色々な科目群が用意されて、全体的に学生の質をアップさせようとしています。しかし、科目間連携といえますか、科目間でどのようなことをやっているかということについては、たとえば、シラバスを検討したり、授業を相互に批評し合ったりするような事に対しては、大学の教員というのは意外と臆病だし、また、他から容喙されることを拒む体質があると思うのです。

そこのところの壁を崩して、授業に無駄がないように、というと語弊があるかもし

れませんが、授業の質保証のため、相互に連携できるようなことを、今後、センターが間に入ってやって行かなければならないということを考えています。

それから、専門教育との連携ですが、このところは、先程のご報告の中で申し上げた通り、非常に難しい。ただ、国語の運用能力の向上が、ひいては、研究やレポートや発表や卒業論文等に繋がって行くということは、皆さんが思っていることです。ですから、改めて何を、どういう観点からやって行くかということを検討して、「この部分だけは教えます」ということを、全学的に先生方へ周知してやって行けたら、というふうに思います。これはまあ、小さな大学だから出来ることなのかも知れませんが。

ついでながら、やはり国語教育についてですが、先程、寺崎先生にご指摘いただいたことで、私としてもまさに今重要だと思っていることがございます。

大学一年生の中には、少なからず、高校四年生になったとでもいうような感じで入学してくる者がおります。学生の文章を見て一番大きな問題だと思うのは、寺崎先生が仰っておられましたが、まさに「調べて書く」ということができていないということです。大学に入って文章を教えるという事は「調べて書く」ということを教えるのであって、作文教育ではないのだということが非常に重要だと思います。

もうひとつ、付け足せば、「論理性がない文章というのはいけないんだ」ということも言っております。今この場内には、かつて私と一緒に授業をやってくださった先生もいらっしゃっておりますが、その先生

と私は、現在大学で「クリエイティブ・ライティング」という、小説を読んだり書いたりする授業を担当しております。その中でつくづく思うのですが、一応形になる小説が書けたとしても、最終的にはやはり、論理的な思考が出来るかどうかと言うこと、つまり一年生の初年次教育の「学びの基礎技法B」、あるいは「文章教室」など色々な呼び方をしていますが、そうした授業を通して、国語の能力をしっかりと身につけた学生が、最終的には4年目で良い創作ができたり、卒論が書けたりするのではないかと。

実際に卒業させた卒業生を見てみると、やはりそういうふうな感じなので、このところは大事ななと思っております。

【柴崎】 ありがとうございます。今のお話の中で、大学人としてはなかなか微妙なところは、半年間、一応授業をして、育てて来たものの、そこでクラス再編成のために成長具合を見ると、実はそんなに入れ替わりが起こらないというお話でした。そういうところが、大学の教育力ということを考える時、一体何なのか、と思わせることもございまして、大学人としても、これは非常に難しい所かと思えます。

それで、いよいよ最後ということで、これは全員の方にお答えいただきたいのですが、こういうご質問がございまして。今回のシンポジウムの趣旨の「建学の精神」というのは非常に大きなテーマですが、この方の質問によりますと、まず「建学の精神が、人間形成を中心に論じられている」と。たとえば関西学院のキリスト教主義とか、國學院の神道精神とか、大正さんだと仏教、立教でもやはりキリスト教が出て来ます

が、しかし「仮にそういう言葉を外してしまうと、人間形成という点では、中身が非常に似通ったものになってしまう。つまり、キリスト教とか神道とかいうことがなければ、同じことを言っているように聞こえて、違いがよくわからなくなってしまうのではないのでしょうか」という、この方はそういうご意見なのですね。

そうすると、建学の精神というのが結局、人間形成、人格の陶冶ということだけに帰着するのであれば、そもそも学部では一体何を教え、学ぶことになるのだろうかということになりますね。今後の私立大学というのは、結局一体どうすればいいのか、どういう方向に向かって行けばよいのだろうかということに繋がりますので、これはなかなか答えにくい質問だとは思いますが、こうした点を各大学ではどう考えているのか。あるいは文科省では——まあ、ここは松坂さんご自身のお考えで結構ですけども、どのように考えていらっしゃるのでしょうか。

関西学院さんからもお話がございましたけれども、建学の精神というのは、やはり、本日問題にしておりますところの教養ということに結びついてくると。それでは、各大学がもっている学部の教育って何だろうということですね。

これは全員に、順番にお答えいただきたいと思うのですが、まずは加藤先生からお願いいたします。

【加藤】 それでは、私のほうから。今日の先生方の話を聞いていて、田淵先生のお話の中で「人格陶冶」ということが出てきたときは、「ああ、うちと同じだ」と少しびっ

くりいたしました。大学の教育とは何かということに関しては、様々な立場・意見があるかと思いますが、教養教育をどういうふうに考えて行くかも、ある程度差はあるかと思いますが。人格形成という点では、共通項はやはりあるのではないかと私は思います。その共通項に向かって、どういう方向性でやって行くのかということで、キリスト教、神道、仏教はそれぞれ違うだろうと考えております。

本学の神道精神は、寛容性という、非常に使いやすい言葉で表されております。一番大きいのは、やはり、神道の生まれた日本は、自然が豊かで生存するのに恵まれていたという中で、多様な神々、八百万神がいたわけです。ですから、多様性を育み、個性を尊重し、共存の道を歩んで行くという、人としての望ましい生き方に沿っており、それに合った建学の精神なので、学生を教えやすいという気はいたします。これは生物学を教えている立場から言っているのですが。

【小嶋】 建学の精神と人格形成・人間形成をどういう風にとすることは、大きな問題で、なかなかお答え出来ないのですが、大正大学に入った学生がまず驚くのは、たとえば学内に僧侶の修行のために坊主頭にした学生が歩いていることでしょうか。しかし、次第にそれにも慣れていくようです。

他の大学にもお邪魔したことがありますけれども、基本的には同じだと思います。大学の特色として、行事があったりします。それから、先程この國學院のキャンパス内に神殿があるというお話がありましたけれ

ども、大正大学の中にも仏教施設がある。そのような環境の中で、4年間のうちに何かしら仏教に関心を持つ学生がいるということですね。それでも、仏教の精神がどのような人格陶冶や人格形成に結び付くのかということについては、非常に判りづらいのですけれども。

就職活動のときになって、学生が自分は大正大学の出身だと言うと、「ああ、やっぱり」と言われたりするらしいです。まあこれは良い面でも、悪い面でもそう言われるらしいのです。ですから、何かしらは影響しているのかな、と思うわけです。

それから、カリキュラムの中に、もう少し、建学の精神というものを反映させたものを考えて行かなければいけないというのは、まさに私がおります教育開発推進センターの仕事かなと、今日のお話をうかがっていて、思った次第です。

【田淵】 ご質問ありがとうございます。先程の私の話の中で「例の人格の陶冶です」という言い方をしたのですが、人格の陶冶というその言葉が——寺崎先生も仰っていましたように——どこから来たのかということを考えて見たときにですね、たとえば國學院さんの言葉と、私どもの言葉とがなぜ同じかということ、これはどうも、あるガイドラインに従ってその言葉が選ばれているということがあったように、私自身、日本の私立大学のシリーズの中でそう考えていたことがあったかと思います。

そういう「同じじゃないか」ということが、一方であって当然というところと、それでは困るなというところとがあるとは思いますが、どうしてもその言葉がありま

す以上、私たちは割と、そこをいつもスタートにするわけです。

ただ、ここでもう一度、寺崎先生も仰いましたような言葉の捉え直しということを考えてみますと、私たちは、たとえばグローバルということ言えば、確かに文科省さんの最近のお話の中にもグローバルということは盛んに出て参りますけれども、でも私たちの創立者は宣教師であったとか、もともとグローバルな視点であるとか、キリスト教は世界的にみると世界の三分の一の——あるいは一神教ということではイスラム教も入れて考えれば——ということになると思いますね、やはり「世界的な視野をもつ人間とは何か」というようなこと、またこの姿勢を訴えようというところが出て参ります。そうしたところから、やはり捉え直しをして行く必要がある。まさに今日私が教えていただいた「社会的機能の意識的反省」というところから、もう一度、具体化する作業を、これから繰り返して行かなければならないだろうと思うのです。

先程教えていただいて、なるほどと思ったのですけれども、つまり、建学の精神というものを、「創立者の言葉だから」というのではなくして、「私たちが求められていることにどう応えて行くか」という視点を持ちながら、独自性をこれから発揮して行くべきなのだというふうに思います。

人間形成と言ってしまうとそれまでののですけれども、やはりそれが「今の現実はどう応えるか」ということに繋がっていかねばならない。たとえばベーツが、今の社会が求めるのは、神学教育もいいけれども、ビジネスマン教育だ、というふうに、大きく学校のカリキュラム内容まで変えて

行くという変化を、私たちは経てきたわけですね。そのことを考えますと、やはり、建学の精神というものが、それが固定化されて、ある種性格化されるということはあってはならないし、恐らく今後ともないのではないかと。もっとダイナミックな力をもった建学の精神というのを、私たちは見て行かなければならないのだと、これが今日、私が学ばせていただいたことだと思っております。どうもありがとうございます。

【松坂】 私が今日のお話を聴いていて思いましたのは、日本の大学に限らず、大学というのはどこの大学であっても、やはり世界のといえますか、ヨーロッパ社会を中心に出来てきた、大学という理念の正統の継承者だという意識が結構強いのであって、その意味では、理念というものが、どこの大学でもある程度似通ってくるということは当然なのではないかと思えます。

世界の中に、独裁国家のようなところもありますけれども、そういうところの大学は、恐らく世界の大学コミュニティの中では大学として認知されていないでしょう。仮に大学という名前がついていても、大学として認知されていないところと、大学という名前ではないけれども、大学として認知されている組織と、そういう所の中には、共通するものがあると思えます。

「それぞれの大学が独自だ」という言葉の裏には、「大学として共通するのは何か」というところがやはりあって、それら二つの面を行ったり来たりしながら議論が進むのかなと思います。ですから、共通している部分が必ずあってこそその大学ですし、更

に、その共通した基盤の中に立ちながらも、それでもなお、独自でなければならぬということ、やはり、個性と言いますか、そういうものが持たれて来るということがあれば良いのかなと思います。

これまでお話を伺っていると、教育と研究の一致ですとか、今日ではフンボルト思想の大学が失われているとか言われるのですが、私たちが実は、今もしフンボルトが生きていたら、「もうちょっとこういうふうによれ」というようなことを言われたりするのではないかな、等と言う事を話したりもいたします。なので、やはり様々な大学で、中世以来続く大学の理念の現代化を繰り返して行って、建学の精神が、もしそこに繋がるのであれば、それは幸せだと思いますし、場合によってはそれが失敗する場合もあるかと思っています。失敗した場合には、一回考え直して、再構築を図ってもらって行くことになるのかなと思います。

文科省というよりは、私自身のコメントでございますが、以上です。

【寺崎】 大変難しい問題でございますが、単純なことから考えてみると、人格教育という言葉が出て来たのはかなり新しい時期のことだろうと思うのです。教養という言葉、それから教養主義、これと並んで、人格、人格主義といった言葉が出てきたのではないか、それは恐らく明治末から大正にかけてではないだろうかと思っています。いずれ確かめたいと思います。

立教大学も、「キリスト教主義」とは言わないで、キリスト教の原理に基づく、キリスト教精神に基づく「人間教育」という

言い方をしています。それが立教の基本的な特徴なんだろうと言われております。

ただ、この問題は、そのことだけを取り上げて行くよりも、もうちょっと広い視野で考えて行く方が判りやすい気がするのです。それは、話が大きくなりますけれども、「人間と知との関係」ということです。

人間と知との関係が、ここ数十年の間に、どのようになってきたか顧みてみますと、たとえば、大学紛争の頃はどうか。あの頃学生達は、「自分」というもの、「人間」というもの、それを中心に学問を考えました。だからこそ、「貴方はなぜ、この学問、その学問をしているのか」「貴方はなぜ、そのように反省もなく専門に耽るのか」。こういう批判を大学に対して投げかけたわけです。

「専門バカ」という言葉が、たびたび言われたのはそのせいで、すなわち「人間」の側から discipline を見る。discipline というのは専門のことですね。人間の側から discipline を見て、discipline を相対化したと思います。いやむしろネガティブなものとして見ました。

その結果、何が起きたか。カリキュラムの決定的な自由化が、色々な大学で起きました。卒論が廃止されるとか、いつ何を選択しても宜しいとか、そういうことが各大学で起きた。それが紛争後の実態ですね。その後、それじゃいけない、という考えが出て来て、今度は discipline をもっと重視すべきだという意見が出て、どの大学でもまた、カリキュラムを厳格化し、体系化することに努めたわけです。

そういうことがあって後に、今度は教養教育が重要だという議論が出て参りまし

た。その意味で、専門 discipline を重視する側は、教養教育が大事だという言葉の前で、言わばもう一度軽くなったわけです。教養教育が大事だと言ったのは、大学の側からではなく、むしろ、経済界の側でした。日経連等々の経済団体が、まず教養教育が重要だということを突然言い出して、それから同じような議論が中教審等々でも定着し、やがて大学に対しては、それにプラスして、大学設置基準の大綱化による実態変化が進行した。そこで大学の側の教養教育の重視が始まるはずだったけれども、そのあたり足並みが乱れて、先程の発表にもありましたように、中止する大学と、そうでない大学が、それぞれ混在したということですね。

そして今、何が起きているか。思うに、ここ40年間くらいの流れをたどってみますと、人間主体と discipline との関係について、まだ、あるべき姿が定まっていないということです。だから私たちは、教養教育をどの範囲でするかということ、あるいは大学教育はどこに目標に置いたら良いかということ、このへんが、もうひとつわからないでいる状況だと思います。

こうして見ると、私は今言われていることの中で非常に大事なものは、カリキュラムポリシーを確かめよということ、これが非常に重要な提案だと思います。つまり、学士課程全体を通して、どのようにカリキュラムを統合するか。これが課題であるということだと思います。その中で初めて私たちは、人間と discipline との関係というもの、学生の前で、繋いで見せることができるんじゃないかと思います。そこをはっきりしないと、四年間の計画は立てられな

いというふうに思います。

その点、今どの大学も苦勞してらっしゃると思うんですよ。立教も苦勞しています。立教では今のところ「専門性に立つ新しい教養人の育成」、これが四年間の目標だと掲げております。必死で考え出した標語でございます。その一方で「教養のある専門人の育成」については、これは大学院でやろうと、そういう分かち方をしようと、今必死で言葉とともにやってきているところでございますけれども、同じようなことを、色々な大学で、色々な言葉でなされているのではないのでしょうか。私は、「人格教育が必要だ」という言い方を長い目で見ると、狭い道德教育というような意味ではなく、教養教育の充実という意味ではないかと思えます。

ちなみに、この前亡くなった宇沢弘文さん——経済学者の方ですが、私は十年間宇沢さんと一緒に、小学校の社会科の教科書の監修者をしたことがございます。その間、あの人の色々なことに触れて、非常にやはり感心いたしました。あの方の課題は「経済学の間人化」ということです。従って『自動車の社会的費用』とか、ああいう御本を書かれた。

彼の課題は、経済学という discipline の人間化だったと思います。同じ圧力が今、大学にいっぱい来ていて、そのもう一つの表れが、例の複合的学部の急増です。複合的学部の急増、立教で言えばコミュニティ福祉学部を作ったり、現代心理学部を作ったりした。それはなぜかというに、確かに経営上の理由はあります。ありますが、しかし同時に、大学が負う別の課題を示しているのだと思います。

それは何かというと、disciplineがあるから学部が出来るのではない、課題があるから学部ができるのだという、新しい学部のつくり方が求められているのだという問題です。これが最近、大学が迫られてきている問題だと思います。私は、こういう動向についても、ただ経営主義だというふうには批判するのではなくて、実は、学問と人間との関係の新しいステージが生まれつつあるとみた方が良いのではないかと、そのように思っております。

【柴崎】 ありがとうございます。非常に示唆に富むお話をいただきました。

今日は皆様、ありがとうございます。最初に赤井学長・加藤機構長からも話がありましたように、教育開発推進機構が出来て6年目、このシンポジウムも3回目になりました。最初は「建学の精神の過去・現在・未来 —私立大学の個性かがやく教育とは—」という題でシンポジウムを行いました。平成22年度にシンポジウムを開いたときは東日本大震災の前の2月でございました。その後の2年前(24年度)には、「私立大学における学士課程教育と教養教育のこれから —建学の精神・キャリア教育・質保証—」という形でシンポジウムを開かせていただきました。今回が「教養教育における建学の精神の可能性」ということで、一応、教育開発推進機構は國學院大學の建学の精神というものを、ある意味で大学の教育のなかでいかに具現化するかということも重要なミッションの一つなので、こういう形で開いてきました。

3回を経て、今日の話を私なりにちょっとまとめさせていただきますと、やはり先

程質問がありましたけれども、確かに、人格形成と言ってしまえば同じようになってしまうかも知れませんが、大学によってまた複数の道筋があるわけで、その一つ一つの道筋が、各大学における建学の精神なのだということも、ある意味では言えるのではないかということですね。

それから、やはり、専門性ということについて最後に寺崎先生の非常に示唆的なお話もありましたけれども、やはり大学の「らしさ」というのは、一つはそのカリキュラムに出て来るわけですから、各大学が苦勞しているように、その建学の精神というのを、マス化、あるいはユニバーサル化された多くの学生が学んでいく中で、彼等に伝えていくための苦勞というのはあると思うのですね。

もう一つ、表に出たカリキュラムとともに、先程の関西学院さんの、125周年のポスターで時計台というのが象徴的に語られましたように、やはりそのカリキュラムにない「場」、あるいは各学部の学統というものも、ある意味で重要だと言えます。学統と言われても、なかなか「これだ」というふうには答えられないかも知れませんが、たとえば國學院大學では神殿があるとか、キリスト教系の大学ではチャペルがあるとか、あるいは色々な人との繋がりもありますし、そういうことを含めて、大学がもっている「場」というものも、実は非常に大きな意味を持っているのではないかと思いますね。

そうした学統という面はあるのですが、それでもなかなか、建学の精神というのは漠然とした部分もあります。ただ、やはり現在は、特に教養教育がその精神をどうし

でも担わなければならないということはあるかと思えます。ですから、それぞれの大学が苦勞している。ひとつ、見える所ではカリキュラムにおいて、またひとつは、カリキュラムにない部分において——課外ですとか、大学という「場」をどのように建学の精神が見える場にするか、ということですか、そういうことについても、多分、各大学が苦勞されているのではないかと思えます。

ただ、最後に寺崎先生が仰いましたように、いずれにしても大学というのは、常に社会と向き合わなくてはいけない場ですので、振り返りといいますか、見直しというのか、つまり考え続けるところが大学の意義でもあります。ですから、今後も我々大

学人——國學院大學含めて、各大学さんが、建学の精神とは何かということを考えながら、それをいかに学生に伝えて行くか。教養教育にせよ、専門教育にせよ、そういうことを考え続けなくてはいけないのだなということ、ありきたりな結論ではありますけれども、改めて考えさせられたシンポジウムだったと思います。

本当に今日は、壇上の先生方、どうもありがとうございました。また、お忙しい中参加していただいたご来場の方々も、どうもありがとうございました。ちょっと時間が過ぎてしまいましたけれども、これで、今日のシンポジウムを終わりにしたいと思います。本当にどうもありがとうございました（拍手）。